

何を帯びているのか

川口基督教会牧師 司祭 ステパノ 柳 時京

1869年に大阪にやってきたウイリアムズ主教は、日本へのキリスト教伝道のビジョンを具体化するため、着任当初から米国聖公会本部に宣教師派遣を求め続けました。しかし、当の米国は南北戦争の最中で、海外に宣教師を送るほどの余裕はなく、ウイリアムズ主教の出身地であるバージニア州は南軍に属して大きな損害を受けました。そのため、戦後6年を経た1871年によく立ち直って、一人の宣教師を送りました。後続宣教師の第1号は、その前年1870年にウイリアムズの母校バージニア神学校を卒業して、直ちに米国聖公会伝道局の宣教師募集に応じたA.R.モリス司祭でした。彼は伝道局より俸給を受けない自給宣教師として大阪に単身着任し、その後東京でも働き、1912年に横浜で一生涯を閉じた宣教初期の功労者です。

このモリス司祭が大阪着任の翌年4月12日に米国聖公会本部に送った報告書簡に、大変興味深い内容が残っています。

「前便を書いた後、ウイリアムズ主教は八人の少年たちのクラスを私に残してシナ(=中国、筆者注)に帰った。その少年たちに私は毎日二時間英語を教えている。彼らやその友人たちに教えることで、彼らに福音の一端に与らせることになり、繋がりを持つようになればと願っている。彼らはよい身分の出身のようで、どの少年も身分の証である刀を帯びており(鉛筆削りにこれを使っている)、彼らに影響を与えようとする努力は価値あることだ。～見通しは良好で、キリスト教への関心は増し、キリスト教を知りたいと願う人達の数は増大していると思う。～彼らは祈祷書を手にして、礼拝式文を追って行こうとしているようだ。彼らは英語が少し分かる人々である。」(「宣教事始め～来日米国聖公会宣教師の報告書簡集、加納重朗訳5～6頁)

ここで言及されている少年の中には、もしかして川口基督教会の初代の信徒となった人がいたかも知れません。新しい時代の幕開けとともに、最初は英語に関心を寄せ、やがてキリスト教にも心を開く人が現れるようになります。しかし、この手紙から見ると、まだ彼らは旧時代の延長線上にいたことが分かります。和服姿で、いわばサムライ身分を示す刀を帯びていたこういう人々が、後に刀を捨てて、その代わりに新たな考えや知識を帯びるまで、宣教師たちの奮闘を糧に、キリスト教は大きく貢献しました。また、人間として生まれ変わる信仰の世界に招かれた経験こそ、日本の近代化に影響を及ぼした影の支えであるとも言えます。そして、今の時代にも、数は少ないけれども、新しい時代への変化を支えるキリスト教の役割は少なくないと思います。そのために、私たちは、身分の証としてかつて少年らが帯びていたものの代わりに、霊の剣と真理を帯びるように呼び出された者であります。

「真理を帯びとして腰に締め、正義を胸当てとして着け、平和の福音を告げる準備を履き物にきなさい。なおその上に、信仰を盾として取りなさい。救いを兜としてかぶり、霊の剣、すなわち神の言葉を取りなさい。」（エフェソの信徒への手紙 6：14～16）